

立正平和運動五十年を振り返って

新聞 智 照

資料をたくさん配りますが、それは全部、今ここで読むということではありません。簡単に話をしますが、あとで関心のある方は、私が出しますたくさん資料を、ちょっと目を通していただきましたら結構と思います。私は、現宗研の顧問で、住職を五十五年もやっておりますので、その間にいろいろ平和運動、人権運動、それから環境運動、それぞれに関わっております。また、日蓮宗の教研会議その他で、いろんな資料なり、レジュメを出しておりますので、そういう中からちょっと選んで持ってきましたんで、それを全部今ここで、読み上げることはやりません。今日の資料としては、手書きのこういうのがございます。これは四年前に書いた手書きでして、ほんと、今日は今日で、ちゃんと書かんといかんのですけれども、もう八十三歳になりましたら、面倒になって、その四年前の資料をそのまま持ってまいりまして、一応まあこれを読んで、ちょっとまたつけ加えたいと思います。

余分なことですけれども、私、今八十三歳で、この中でただ一人の軍隊の経験者だろうと思います。戦争中の海軍軍人でした。十六歳で志願しまして、十七歳で入隊しまして、ほんと、自分がもう死ぬというつもりでいたんですけれども、昭和二十年に戦争が終わって、生き延びて帰ってきました。戦場には出ておりません。ずっと内地の航空隊にいました。

それから、今日の参加者の中で、私が一番僧階が低いという人間です。私は、准講師で、准講師五十五年、やって

おります。日蓮宗の僧階制度について批判を持っておりますので、もう自分は僧階を取るまいと思ひまして、五十五年間、准講師を通しております。亡くなる時も、准講師でございます。

そういう私ですけれども、時々こうして、現宗研には早くから関係しまして、嘱託から、年を取って顧問になりました、ずっと現宗研には力を入れております。そのことと、それに関係しまして、カリキュラム作成委員会に属していたことがございます。カリキュラム作成委員会というのは、信行道場のカリキュラムを作ったり、いろいろ宗門の教育の読本を作ったり用意を致しました。そういうことでも、だいぶ、しょっちゅう宗務院へ出てきて、宗門のために少しは、働いたという思いを持っております。それから、それに関係して「カリキュラムを作るんだったら、信行道場に入ってこい」と言われまして、信行道場の副主任を五回と、それから、主任を一回やってみました。そういう教育の現場も体験をしてきております。宗門の内外で、平和活動、環境活動、それから、人権活動、やっております。現在は、人権推進委員会の、まあ私が一番、年を取ってますので、委員長をやっております。だいたい月に一ぺんぐらい集まって、人権に対する宗門のいろんな問題を討議をしております。人権関係もだいぶ宗務院からパンフレットをたくさん出してありますが、その中には、私の執筆したものもあり、またたくさん他の方が一緒にやっておりますから、皆さんがたで相談をしながら作り上げていった、というようなものがございます。

宗門は、平和運動にしましても、人権運動にしましても、何となく、積極的に自分達のほうからこれをやろうということなく、世の中がそういう風になってきたから、宗門でもやらんといかんと、そういうところがございます。そのこともまあ、平和に関しては、ちょっと後で申し上げたいと思います。人権問題でも同和問題が問題になってきて、そこで初めて人権に関して、前田幸広さんと二人で、嘱託で宗務院へ勤めて週に三日ぐらい勤めていたんですけれども、やがて委員会ができたので、今はその時だけ出てくるという形でやっております。

平和運動にしましても、それは、今からやります。まず、手書きの「立正平和運動五十年を振り返って」というの

が、四年前に書いたレジュメでして、今回、ちゃんと作らんといかんのですけれども、もうさぼって、私は自分で「さぼりの日明」と言うてるんですけれども、これを使わせていただきます。読みながら話を加えていきます。

立正平和運動五十年を振り返って、本年は、というのはその平成十七年ですよ、〇五年ね、二〇〇五年の文章です。本年は、広島・長崎被爆敗戦六十周年であり、日蓮宗の原水爆禁止・世界立正平和運動、正式発動の五十周年にあたる。その前の年から始まっていたんですけれども、正式な発動がそういう、平和運動の規則（日蓮宗規定）ができてから、正式になったわけですね。運動がどのように続いてきたかを検証し、総括してみたいと。

一、戦前・戦時の戦争協力

昭和十年代です。日中戦争、太平洋戦争を「聖戦」と讃え、檀信徒を鼓舞し戦死者に管長より法号授与（仏教における、「靖国」行為）する等の戦争協力、戦死美化、戦争は素晴らしいこと、戦死した人は気の毒だけれども、戦死をしたという行為そのものは、お国のために死んだんだから非常に立派なことだと、それで戦死者には、院日居士号が与えられて、はじめのうちは管長から出しておりました。ところが、戦死者がどんどん増えてきたら、とてもその、宗務院から、或いは管長から出すわけにいかんわけです。それで、各お寺が、住職が、法号をつける、で法号をそのつける時には大抵、院日居士号を与えているわけですね、戦死をすれば院日居士号。そういう形で、戦争協力をしていたわけです。

ただし、日蓮宗がもう、全面的に戦争協力ばかりしたんじゃないなくて、受難もありました。と言いますのは、日蓮聖人の御遺文の中には、天皇を批判するところがあるわけですわね。或いは、政府を批判するところがあつて、まあ幕府を批判するのは、昭和の政府から見たら、別に構わないわけですけれども、天皇に対して、海の喪屑と消えられたとかね、いろいろなありますわね、そういうところがありますので、それに対して、日蓮宗のほうで、そういう

ことがどんどん問題になってくるわけです。各宗教のね、戦争の遂行に対して、或いは天皇絶対に対して、具合の悪いというのがどんどん摘発されていくわけです。それで日蓮宗では、先に、自主的に御遺文の中のそういう部分を出さない御遺文を集めた御遺文集を作ったわけです。そういうので、ずっと戦争中、通してきたわけです。だから、日蓮聖人の本当の御遺文集というのは、戦後になって初めてありのままの御遺文集ができたわけです。勿論そういう箇所はごく僅かですけど、しかし、意識的に、そういうことを日蓮宗はしたと、いう過去があります。ただ実際に、それをやらないと、もうどんどん弾圧されていきますから非常に苦しい時代だったわけです。

二、戦後の混乱と反省

やがて、一九四五年、昭和二十年の八月十五日に、天皇陛下の詔勅が発表されて戦争が終わります。私は海軍におりまして、前の晩に戦争が終わったというニュースは聞きましたけれども、実際に翌日、ちゃんとそれが発表されて戦争が終わったわけです。命拾いをして帰ってまいりました。

しかしその戦後の中で、敗戦後、社会も思想も混乱、生活は都市寺院、農村寺院とも困難な中で徐々に体制を整え、十分でないにせよ、過去の戦争協力を反省した時期がありました。これは、どこの全ての団体・宗教が、それぞれ反省はしているわけですね。あの戦争は間違ってたということが、つまり、情報が隠されておりましたから皆こう馬車馬のように、両側を隠されて、前だけ、国の為に尽くすことだけが、日本は正しいことをしてるということだけが、情報として、他のことは耳に入っていないわけですから、どこもみな誤った生き方をしていたわけですね。それに対して、宗門も含めて各宗教が皆、一応反省をしたわけです。ただし、その反省が十分であったかどうかというのは、結局その後の各宗、各集団の、各宗教のやりかたにかかってくるわけですね。

三、原水爆禁止、世界立正平和運動の開始

これは、昭和二十九年に始まるんですけども、昭和三十年代の前半が、そういうのが、わっと盛り上がるわけです。でこれは、戦争に対する反省があったけれども、広島、長崎に原爆を落とされて、その原水爆の禁止の運動というのは、すぐには起こらなかったわけです。もうとにかく、原爆を使ったアメリカに占領されてるわけですね、占領軍がいて、実際また、私は二十歳頃、アメリカの占領軍が歩いていっぱいいると、キャンプがあちこちにある。神戸市内にも二つありましたけれども、そういうところで、進駐軍がいて、うっかり進駐軍に逆らったらえらいことになる、そういうような時代があったわけですね。それで、あまり、内部的には、戦争の批判、反省はしませんが、とにかく、生活がものすごく苦しいわけですね、都市寺院は皆、皆じゃないですけども、かなり、空襲で焼けてしまってる、うちのお寺も丸焼けです。神戸空襲で一度で丸焼けになりましたけれども。それから農村寺院は、農地解放というのがありまして、お寺がたくさん土地を農地を持っていたわけですね。それで、小作人を置いてお百姓さんたちに耕してもらって、そのアガリを取ってたわけですね。そういうのを昔からやってるわけです。もうずっと、奈良平安の昔から、お寺が寺田、ね、お寺の田を持って、そのアガリで収入にするというのがあったわけですけども、それが、農地解放で地主は、一定の土地しか持てないということになったわけです。そうすると、たくさんのお寺、土地を持って、どんどんその収穫を得ていたお寺は、結局、地主としては僅かの土地しか持てなくなったわけですね。或いは、自分が耕さないんだったらもうそれはとってしまおうと。で、その、実際に百姓をする人達に、それを与えると、そういう農地解放があったわけです。まあこの、理念そのものは良いんですけども、それで、農村寺院もかなり苦しい寺院があったわけですね。都市寺院はもう、生活するのに汲々としておりましたから、お寺をどうして立て直すか、ね、もう丸焼けになったお寺はいっぱいあった、そんな時代を通ってきたわけです。

やがて、原水爆禁止世界立正平和運動というのが始まるわけです。これは、まず一番最初に何故こんなことが起こったかという、広島、長崎のは、これは戦争中であつたということで、まああまり、日本人としては、とやかくその当時は言わなかったんですね。大変酷かったということは知つてますけれども。そのあと、アメリカとソ連（ロシア）が対立をして、両方でどんどん原水爆の実験をやりだしたわけ。実験をすると、死の灰がずっと広がって落ちてきます。実験ですよ、だから人は直接、爆撃では死なないけれども、死の灰、その実験の結果、落ちてくる灰によつて冒されるわけですから。日本人にも、船長が一人、亡くなりまして、それから、こんなことではいけないということで、そういう実験を禁止して原水爆そのものを無くさなければいけないんだということが、わつと広がって、一番始めに東京の杉並区の主婦たち、女性が立ち上がって始まったわけです。それからそれが全国的にぱつと広まりまして、日蓮宗の中でも、世界立正平和運動というのが始まったわけですね。だから、原水爆禁止というのが、頭に付いていたわけです、「原水爆禁止世界立正平和運動」というね。原水爆禁止の市民運動が起こり、他教団に先駆けて。だから、始めに運動が起こつたのは、そういう女性たちが始めて、それで全国に、市民の間に広がったんですけれども、宗教の中では、教団の中では日蓮宗がかなり先駆けて始めました。これは日蓮宗としては、誇りに思つていいことです。他教団に先駆けて本宗で同年始まり、増田管長の時代です。まあ増田管長は、とやかく言われる人でございましたけれども、（笑）あの、私もちよつというんな口を滑らせますけども、あの、増田管長の時に結局は、その下にいる人達がそれを始めたわけですね。増田管長はそういうぱつと華やかなことが好きな人でしたから、ぱつとそれに乗りましたね、それで、原水爆禁止世界大会にも出て来るしね、それからあつちこつちで日蓮宗としても、その大会を開いていくわけです。だから非常に始めは、華やかなことだったんですね。清澄からぱつと、鳩を飛ばしてすとかね、そんなことやってたわけです。まあその頃私はまだ、平和運動には入っておりません、ただ住職になるかならんかい頃で、じつと、そういうの、ああ、こんなことやつとると見てたわけですけども。

で、翌年の昭和三十年に、宗会で「立正平和運動本部規定」というのができて、それで、立正平和運動本部というのが、宗務院の内局機構の外にできたんですね。だからそういう、特別な機構が、宗務院の外にできまして、今のうちに、護法伝道部がそれをやっていると、か、教務部がそれをやっていると、かいうことじゃないんです、その当時はね。で、そういう本部規定が可決されて、正式に出発を致しました。で初期の活動は、管長総長が先頭に立ち、本部員始め宗門ぐるみで活発に活動となりました。これはもう、そうやって増田管長から始まって、増田管長が華やかなことやりましたし、後を継いだずっと後の人も、管長、総長、皆非常に先頭に立ってやったんですわ。その辺が、それから後で少し落ちてくる時代と違うわけですね。一番トップが、先頭に立ってやったわけなんです。で、しかし、そうやって宗門のトップが先頭に立ってやるけれども、地方ではそこまではいかないということです。地方の支部、一応、各管区が、宗務所が、支部になるんですけれども、特別に下からの盛り上がりというのはなかったわけです。皆、まだ苦しい時代ですからね、各お寺、自分のお寺を立て直さんならん、生活せなならん、必死になってた時代です。しかし、昭和三十四年から、千鳥ヶ淵の、戦没者追悼、これが始まりまして、これは今もずっと続いております。今これだけが行われているという現状ですね。まあ行われていること自身は、非常にいいことです。

四、立正平和運動の停滞

やがて、昭和三十年代の後半ですけれども、運動本部が独立規定から宗務院規定に移され、今まで独立の本部があったのが、それがもう宗務院の所属で、一般の規定の中に入り込んで、始めは教務部に属して、それから後に、護法伝道部に移すわけですけどね、そうすると、やはり一般の宗門行政の一部になってしましまして、活動が落ちるわけですね。まあ、宗務院のあまり悪口を言ったらいけませんけれども、どうしてもお役所仕事になってしまいうことですね。だから千鳥ヶ淵だけは、ずっと続いている、これだけはまあ、大変誇れることだと思います。

また、実際に宗門の問題だけではなくて、国際情勢とか国内情勢とかいうのが、非常に難しくなってきたわけなんです。アメリカとソ連が、ソ連、ロシアですね、が対立してるということは、それにつれていろんな運動が、こううまく一緒にできないということになるんですね。なんとなくアメリカに味方をするような考えの人もあり、当時のソ連に賛成するような人もあり、いろいろ、政治的に色分けされるようになってきて、そうすると、運動が非常にしにくくなるわけですね、宗教団体では。そういうことで、だんだん停滞をしていくわけです。

五、護法運動の開始と、立正平和の会の結成

昭和四十年代。昭和四十年代ですから、もう、二十年経ってるわけです、終戦からね、戦争が終わってから。創価学会の乱暴な布教展開につれ、宗門の危機意識が高まり、だから創価学会が暴れ出したので、日蓮宗は、ものすごく危機意識を持ったわけですね。それまでは、各宗教それぞれね、割に仲良く棲み分けていましたからそんなでなかったんですけど、創価学会がもうものすごい乱暴な布教をやるわけですね。そういうところで危機意識が高まり、「護法」法を護る、日蓮聖人の教えというのは、そんな創価学会が言うてるようなことと違うんだということで、護法が高まり提唱されて、運動は対外活動から内側へ、信仰刷新運動ね、日蓮宗と言うても、本当に、純粹の信仰でみんながやってるかどうか、そうじゃない、戦後の苦しい時代、もうほんとに日蓮聖人の教えを広めるよりも、自分達がなんとか生きていくのが大変だったというほうにこう重心が傾いていたわけですから、それで、片山日幹猷下が、護法運動を始めるわけですね。で、法を護る、これはまあ一度いろいろ批判がありました。「護る」というよりもね、もっと、社会に向かって出て行く運動でないといけないんじゃないかと、いうようなことがありましたけれども、しかし、一応宗門の内側をもっと刷新しなければいけない、そういうその考え方には、私も同感はしました。もっと宗門がしっかりせんといかんと、ね、もっと、純粹な気持ちでみんな信仰を持って運動せにゃいかんということで、まあ

一応、外に向かつて原水爆禁止をわーっとやってきたところから、内側へみんなの心が向いて行ったわけですね。

立正平和運動は、継続のため有志による立正平和の会ができたわけです。つまりそうやって、護法運動で信仰刷新ということになると、外に向かつて、原水爆禁止ということを、活動するというようなことは、薄れてくるわけですね。外に向かつての運動が薄れて、それではいけないと、やはり平和運動というのは非常に大事でね、日本は戦争をして、その結果反省をしたんだから、平和を保つことをもって運動としてやらんといかんということで、有志が集まって立正平和の会というのを作ったわけです。であと、そこに読んでいただいたらいいんですけども、非常にいろんなことが問題がありまして、七〇〇遠忌前後の立正平和運動から、ずっとお題目総弘通運動における立正平和運動と、その辺、恐れ入りますが、自分で読んでいただきまして、結局どういうか、まあ今必ずしも悪くなってるんじゃないんですけども、皆の心の中には、そういう平和が大事ということは分かっているんですけども、運動としては、立正平和の会が表立ってやっているという以外、いや、その他に色々やっている人がいるわけですね、それは、ひとつに大きくまとまって、日蓮宗がまとまっているというよりも、個々にやっているのと、まあ立正平和の会は立正平和の会でずっとやっておりますし、それから、もうその他に、海外へ出て行っているいろいろな人がたくさんいるわけですね。平和運動というのはやはり、国内だけでやっていては駄目なんで、国際的にやらなければ、国際に訴えなければ駄目だということですね。まあ私もニューヨークで、平和行進、四回やってきましたけれども、そういう国連（核不拡散問題）に訴えるということが非常に大事でその度ごとに、日本から代表団が行ってやるわけですね。来年また、国連へ何人か日蓮宗の中から行く方が出てくると思いますけれども、そういうことを続けていくと。

それから、配った中で、藤井日達さんのことを書いた、私の文章三枚をまとめたものがありますんで、またそれも読んでみてください。私が、平和運動に乗り出すことになった中には、藤井日達上人の影響を受けた、藤井日達さ

んとよく一緒に海外に行くんです。インドでも、日本山の藤井さん、もうかなりお年でしたけれども、インドの民衆が暴動を起こして、それを心配して日本山の人達が断食をやるわけです。そういうのを目の前で見たわけですね。よその国の民衆のために、断食をやっていると、そういう藤井日達さん始め日本山を見まして、それから日本山に関心を持ちまして、まあ勿論日本山と日蓮宗とはやり方も違っているところがあつて全てがいいということじゃありませんけれども、教団ぐるみで平和運動をやつてるところに対しては、非常に良い仲間になっております。

あと、その戦争の、十五年戦争といわれます、昭和の二十年までのこと、その経過とその中で私がその時には、何歳でどういうことをしてたというようなことも書いております。あと、まあ適当に、今までの中で、いろんなレジュメ出しましたんで興味のある方は読んでください。私は、大変口下手で、また言葉が少ないんですけれども、それでも五十五年も住職しておりますと、色々講演を頼まれてまして、小学校でも講演しましたし、中学校の一貫校でも講演したことがありますし、それから、立正大学でも講演したことがあるし、臨済宗の花園大学で講演したこともございます。(その他、多くの平和団体で) そういうことで、少しでも人々に、平和の意識を持つて貰うということができればと思つて、これから先も、元気なうちは、元氣もだいぶなくなってきましたけれども、老骨を捧げたいと思つております。以上です、終わります。(拍手)

質疑応答

司会者 どうもありがとうございました。五分ほど、質疑応答の時間を取つてございます、何かございましたら、挙手いただければと存じます。はい、川崎上人。

質問1 失礼します、研究員の河崎と申します、よろしく願ひします。先生が、ご自身がその、軍隊におられて、という話から、五十年間を振り返つてということ、今、お話がありましたけれども、最後のレジュメの八番の

部分で、反省と展望というところに、非常に私が関心を持っておりまして、先生がこうやって、今まで、平和運動ということをやってこられた上で、まあ、五十年の反省を振り返ってですね、今後、こうあって欲しいとか、この立正平和運動というものは、こうあるべきだ、というようなもし、お話がちょこっと聞ければ、という風に思うんですが。

新聞記者

はい。今、河崎さん、お師匠さんと、ご本人と、一緒に平和運動をやっている方ですけども、やはり日蓮宗としても少し積極的に。一応ね、平和、環境、「環境平和のち」というスローガンは掲げているわけですね。いのちというスローガンを私は、環境、平和、人権として、その三つを含むものが、「いのち」という風に捉えたほうがいいという、そういう考えは持っておりますけどね、一応日蓮宗では、そういう風に出しているけれども、あまり実際にやっていることというのは、まあ言論活動はある程度ね、いろんな人が文章で書いてるし、また、実際に個人的にいろいろな国際活動をしてる人がいますから、それはそれでいいんです、ね、この中にも、個人でやっているというか、その地方でやってくれる方が何人もいますけれども、けれども、宗門としても少しそういうスローガンを掲げた以上は、平和のもっと実践的な運動をやって欲しいと、そういう気持ちは持っております。けれども、あまり宗務院というのはやっぱりお役所ですからね、宗務院にやれやれと言ったって、限度があるわけですから、やはりそれよりも実際に、日蓮宗に属する僧侶や信徒が自分達でどんどん進めていくと、それを盛んにしていく、日蓮聖人の教えから言えば、そういう風にするべきであるという風に、思っただけで進めるといことが大事だと思っております。ですから、私は今、宗務院そのものには、そういうことはあんまり望みませんけれども、ただ私達が今まで、ニューヨークに行ったりジュネーブに行ったりした時には、いつも、宗務院から、派遣の、日蓮宗から派遣するという令状を貰って行っただけですわ、もう、それももうこれからは止めようかと思っただけです。始めの頃はやはりそういう国外へ行っただけ、

国際会議に出るのにやっぱり日蓮宗から派遣されるという形にしてもらったほうがいいと、折角日蓮宗は、立正平和運動というのをやってるんだから、やってきたんだから、ということでもいいつもね、お願いをしたら、そしたらちゃんとね、令状をくれるんですわ、日蓮宗から派遣することだね、私はそれ何回も貰って、あっちこっち行きましたけどね。

そのことと、それからやはり平和運動というのは、国と国との平和というのが一番大事なんですから、国内だけではなくって国際的な活動をやらなければ、あまり、効果がないということですね。まあ部分的には、国内の問題、大事なんですよ、一つずつね、ですけどもそれと同時に、国際会議にどんな出て行かなければ駄目だと。国際会議で発言すると、だんだんどういうかね、国際的にこうある程度日本の代表団は、とてもその素晴らしいというか、そういうこと言われることもあるわけですね。また一度、文章に書いたことがありますけれども、モスクワで開かれた会議に、これはソ連が、当時のロシアが、自分達も平和をやってるぞというそういう宣伝もあって、世界中から宗教者を集めたわけです。で、日本からも何人も行きましたけどね、その時に、モスクワで開いた分科会にひとつ出まして、それで私、日本の代表団をこういう風に主張するという皆約束がありますから、原水爆禁止の話ね、それをわーっとやったわけです。そしたら、その、当時のソ連、今でもロシアはそうですけども、皆核兵器をたくさん持ってますからね、それを皆、私、アメリカとソ連と並べて攻撃したわけです、そんなことはいかんと言うて。

そしたらそのあとで、私達の日本の団員に付き添ってる、日本語が日本人と同じくらい喋れる向こうの、ソ連のお役人がいたわけです。まあ、世話をしてくれるのと、私達が何を言うのか監視をするというのがこの両方の役目があったんだらうと思いますけどね、そのお役人が、お昼のテーブルを囲んだところでやにや笑いながら、「新聞さん大演説をぶちましたね。」と言いましてね、おかしかったですけれども、そういうような、まあ

これ冗談でそういう風に言うような交流を、もうずっと続けてきたわけですね。だから、草の根の交流としては、私達は、アジアが中心ですけれども、ずいぶんいろんな国際会議で発言をしまして、日本の原水爆禁止という運動は、かなり認められているということもあると思います。

司会者

はい、すいません、お時間がまいりました、新聞上人、どうも大変ありがとうございました。お疲れ様でございました。(拍手)